特集のことば

愛知大学は人文系と社会系を合わせた文系の総合大学です。人文系の精粋は古典です。古典の知識はグローバル化時代の教養としてもますます必要になって来ています。

今回は人文系の古典に焦点を合わせてみたいと思います。巷間には古典は難解という印象があります。古典に慣れ親しむためには「古典を撫でる」ことが一つの道ではないでしょうか。

「古典を撫でる」とは、幼子が眠っている大柄な犬の頭を撫でると、その犬が優しく目を見開きまた物憂げそうにすやすやと寝入るような体験をすることをイメージしています。

肉聲、その言葉と形

経済学部　伊藤　勳

「あらゆる作家と作品に、肉慾以外のもので結びつくことを肯んじない」と、オスカー・ワイルドにその窮極的な対象を見出したのは、三島由紀夫である。恰も古代ギリシアにおいて二人の友人が友誼の印に二に割つた硬貨や骰子などを双方が持ち合つたシュンボロン即ち割符の如く、三島は世紀末の寵児ワイルドに藝術家として一致契合する得難い相性を見出したのであつた。

三島が自分の目で選び自分の所有物としたのは、他ならぬワイルドの『サロメ』であつた。「私達は肉聲に帰らねばならない」といふワイルドの主張は、まさにこの作品において藝術として形象化された。肉聲とは言葉本来の意味に立ち返り、多義的な曖昧さに曇らされず心象喚起力に長け、言霊（ことだま）と言ふべき律動的な生命的音楽性を宿した言葉を言ふ。十九世紀の西欧は即物的表現が衰へ、自由、平等、博愛等々、様々な観念ばかりが先走り、言葉の意味が曖昧になりその生命力が衰頽した時代である。言葉は明確な輪廓をもつた形を描き出す生命力を失つた。

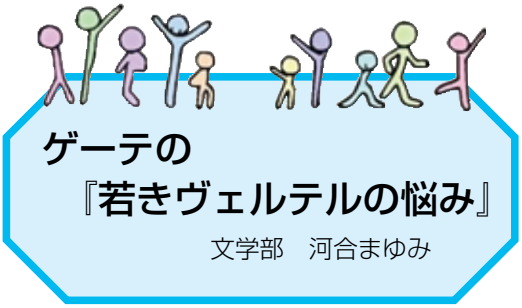
形は同時にその作者の心を反映する。『サロメ』の中で、姿を見せぬままに、牢獄の暗闇から朗々と響き渡るヨカナーンの聲は、単純な内容を言葉を替へながら繰返し、一つの様式と化してゐる。「様式の繰返しは人に安らぎを与へる」と言ふワイルドは、様式の持つ効果を熟知した上で、その技法を駆使してゐる。様式化即ち形を与へられた言葉には、律動する赫奕（かくえき）たる生命力の輝きがある。肉聲の美しさはこの作品にとどまらない。同時代の批評家Ａ・シモンズは、「『獄中記』は聲に出して読むべきである。その流麗さは肉聲を顧慮したものであり、黙読するとこれらの澄んだ言葉に殆どあるやうには見えない美しさが、聲に出すと顕れてくる」と評した。因みにワイルドはアルフレッド・ダグラスとの同性愛の廉（かど）で、重労働を伴ふ二年の刑を宣告され、レディング刑務所に投獄された。『獄中記』とは出獄直前、当局の特別の計らひを得て、ダグラス宛に書き綴つた書翰である。

精神形態としての様式の確立によつて成し遂げられたワイルドの肉聲としての流麗な言語表現は、三島の美意識を虜（とりこ）にするものであつた。そして終には昭和三十五年、文学座により三島

の演出で『サロメ』の上演がかなふことになつた。刮目すべきは、三島が日夏耿之介の『サロメ』訳を台本に選んだことである。その理由は、「この字面のむやみとむづかしい飜訳が、耳から入つて來ると、實になめらかに、わかりやすいセリフ」になつたからである。音読すると「力があり、リズムがあつて、直に心に觸れて來る名譯」だと言ふ。耿之介にはワイルドの文体の魂を日本語に移し替へるだけの技倆が具はつてゐた。「かたちに因つて、こころを忍ばん」とする藝術観をもつ耿之介は、「詩技の事は稟性神賜」と心得、「民主的時代の衆民は心より藝苑に至るの道を知らぬ詛はれた思想上の賤民」であると断じた。かうした言葉には、「藝術を最高の現実」として扱い、「我々に関はらないもののみが美しい」と言つたワイルドの反響さへも感じられる。殆どワイルドと揆を一にする藝術的立場を取る者にして初めて成し得た訳業であつたと言へる。

かつてウォルター･ペイターの『ルネサンス』をスウィンバーンの詩の一節を借りて、「精神と感覚の黄金の書、美の聖典」と称揚したワイルドはなほも後年獄中で、「私の人生にかくも不思議な影響を及ぼしたあの本」と、『ルネサンス』の及ぼした薫習の深さを追懐したのであつた。ワイルド藝術はペイターの藝術思想に培はれ開花を見た。その根本的思想は何かと言へば、古代ギリシアのエピクーロス哲学に他ならない。キリスト教とは全く相容れないエピクーロス思想は、人生観としては十六世紀になつてフランスのモンテーニュの『随想録』において甦へり、その原子論は十七世紀前半、同じくフランスのピエール・ガッサンディによつて掘り起こされニュートンもそれを受け継いだ。藝術思想としては十九世紀後半英国のペイターによつて復活したのであつた。その中枢をなす考へ方は、感覚に従つて見るべし、自然に服従すべし、心境の平静即ちアタラクシアを保つべし、この三点に尽きる。日本人にとつては当たり前の思想でも、キリスト教社会においては、ペイターは異端者として疎まれ、ワイルドは社会から抹殺された。

ワイルドと肉慾で繋がつた三島は、当然ペイターと無関係ではあり得ない。ゆくりなくも「不思議な影響」の源に踏み入つた。『ルネサンス』に代表されるペイター藝術は、ゲルマン的象徴思考とギリシア的合理主義思考との融合形態の実現を目論むものである。三島は『貴顯』においてペイターに倣ひ、「微妙な寫實と透明な抽象性」とが入り混じりつつ、最終的には明確な輪廓を結ぶことのない表現形態を試みたのである。とまれ、三人共に偽善的社会に厳格な言葉の形を示しつつ、なほも形なるものの無であることを明らめた。



ドイツ文学を代表する文豪といえば、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテである。そのゲーテが24歳のときに書いたのが『若きヴェルテルの悩み』で、1774年に出版されるやドイツで大ベストセラーとなり、各国語に翻訳され、ゲーテの名をヨーロッパ中に知らしめることとなった。かのナポレオンもこの本を愛読したそうである。一般には「恋愛小説の古典」と見なされているが、そこで描かれているのは単なる恋愛にとどまらない。

この作品は、主人公ヴェルテルが友人ヴィルヘルムに宛てた手紙からなる書簡体小説で、読者は作品を読みながら、恋する主人公の喜びや苦しみをともに味わうことになる。まず作品の前半、ヴェルテルは、訪れた地方の町でロッテという女性と出会い、たちまち心を奪われる。彼女にはすでにアルベルトという婚約者がいたが、不在であったため、ヴェルテルはますます彼女に魅了されていく。彼女は、亡母に代わり家事をこなし、幼い弟妹の面倒を看る家庭的な明るい娘であった。ロッテが舞踏会のための服装で弟妹たちにパンを切り分けてやる象徴的な場面は、後述するオペラや映画でも必ず登場する。またロッテは、当時の女性にはめずらしく、